

令和5年度

入試問題集

国語

学校法人藍野大学
明浄学院高等学校

以下の【一】～【四】の字数制限のある問題はすべて句読点や記号も字数に含めて数えること。

【一】 語句に関する次の問いに答えなさい。

問一 次の①～⑥の慣用表現の意味として最も適切なものを後のア～カの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 虎の子 ② 馬の耳に念仏 ③ 月とすっぽん ④ 猫の目 ⑤ 虻蜂取らずあぶばち ⑥ まな板の鯉こい

ア 大切に秘蔵するもの。

イ どんな貴重なものでも、価値のわからない人には無意味であることのとえ。

ウ 物事が絶えず移り変わるようす。

エ 形は似ているが、あまりにも違いすぎることのとえ。


オ 相手のなすがままに覚悟を決めていること。




カ 欲張りすぎては損をすること。

問二 次の傍線部の語の送り仮名について、正しい場合は○、間違っている場合は正しく直して書きなさい。

- ① 雲行きが怪しい。
② 年のわりに考えが幼ない。
③ 場内が騒しくなってきた。
④ 彼は穏やかな人物だ。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。


意図や欲求を持つロボットが実現できれば、そのロボットとの関わりを通じて、多くの人はロボットに意識を感じるようになると想像する。

意識には、三段階あり、それらは、覚醒しているという医学的意識、夕日を見て感動する自分に気づくという現象的意識、自分という存在を認識するアクセス意識の三つである。覚醒しているという医学的意識は、ロボットが活動していれば、それだけで多くの人は感じることができる。しかし現象的意識は、かなりやっかいである。本当に感動しているのか、感動している振りをしていただけなのか、外からの観察だけでは判別が難しい。ただ、それがロボットであつても感動している振りをすれば、かなりの人が、ロボットが感動している、きっと人間のような現象的意識を持つに違いない、と考える可能性はある。


そして、最も難しいのが、自分という存在を認識するアクセス意識、(A)、自我である。これも現象的意識に似たようなところがあり、本当にアクセス意識を持つているのか、単に持っているような(B)をしているのかは、外からは区別が付き難い。そのロボットが「私は」という言葉を使えば、いかにも、アクセス意識を持っているかのように感じてしまう。

このように、(C)は、本当にそのロボットが持っているのかどうかを確かめることは難しい。しかし、意図や欲求を持ち、「私は」と話してきたり、欲求が満たされれば喜んだりするロボットを相手にすれば、多くの人は、そのロボットに意識を感じるわけで、まずは、そうした人に意識を感じさせるロボットを実現し、そこから本当の意識研究に取り組んでいくべきであろう。

そして、意識を感じることができるとロボットは、人間とも人間らしい関係を築くことができると想像する。

人間は日常生活において、他者の意識を感じながら、人間関係を構築していく。意識を感じない相手には注意を払わない。 (D)、意識を感じるロボットは人間と同様に、人間と社会関係を形成することができるはずである。

そうして、人間とロボットが互いに社会関係を築くことができるようになって初めて、ロボットは人間社会の一員となり、他の人間と同様に人間にサービスを提供できるようになる。

そうなれば、私たち人間はロボットと非常に親密な関係を築ける可能性があり、親密な関係にある者には、自分と同じような権利を与えたいかもしれない。 そのようなロボットに権利を与えたいような社会が、いつ訪れるのかは解からない。しかし、ロボットに強い思い入れを持つ人は今でも少なからずおり、今後、ロボットの機能が進化するとともに、ロボットに権利を与え、人間と同様に扱いたいと思う人は増えるだろう。

(石黒浩『ロボットと人間』による)

* (注) 覚醒……目をさますこと。意識や感覚がはっきりと働きはじめること。

問一 二重傍線部①く⑤の漢字をひらがなに直しなさい。

問二 傍線部 a 「やっかい」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 驚くべきこと イ つまらないこと ウ 途方もないこと エ 面倒なこと

問三 傍線部 b 「難しい」 c 「考える」の品詞名を次のア～エの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 動詞 イ 形容詞 ウ 形容動詞 エ 名詞

問四 空欄部（ A ）（ D ）に入る語として最も適切なものを次のア～エの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア しかし イ すなわち ウ または エ ゆえに

問五 空欄部（ B ）に入る適切な語を本文中より二字で抜き出しなさい。

問六 空欄部（ C ）に入る語句として最も適切なものを次のア～ウの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 医学的意識や現象的意識 イ 医学的意識やアクセス意識 ウ 現象的意識やアクセス意識

問七 傍線部 d 「人に意識を感じさせるロボット」とありますが、このロボットを説明した次の文の空欄にあてはまる語句を本文中より七字で抜き出しなさい。

周囲や他者から区別して（ ）を意識したり、欲求に応じて感情を表現したりするロボット。

問八 傍線部 e 「意識を感じることができるとあるロボットは、人間とも人間らしい関係を築くことができ」とありますが、その理由を解答欄の「くから」に続くように本文中より三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問九 本文の内容に合致するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ロボットが人間にサービスを提供できるようになれば、互いに人間らしい関係を築けるようになる。
イ ロボットと人間が親密な関係になれば、ロボットを人間と同様に扱いたくなる人は増える。
ウ ロボットが人間社会の一員となり、人間と同じような権利を持つ日は近い。
エ ロボットの権利についてはごく一部の人が強い思い入れを持ち、それを与えたいと考えている。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「今日は鉄棒をやる」

と橋本先生が言ったので、やっぱり体操の時間なんてなければいいのに、とミツエは思った。

① ジュンビ体操のあと、ブランコより校舎寄りにある鉄棒のところへ行った。鉄棒は、中高低二本ずつ一続きのものと、六年生でも跳び上がらなければつかめない高さの独立したものが一本あった。男子のあとに女子で、背の順に一人ずつ鉄棒をする脇で、橋本先生が補助をした。

「つぎは逆上がり」

ミツエは死にたくなかった。列からすこし横に出で、先に逆上がりをしている男子から何か参考になることを見つけようと、一人一人の逆上がりをよく見た。逆上がりができる子は、なぜあんなに何でもないとのように、鉄棒に巻きついてしまえるのだろう、腕の力が強いのだろうか、蹴り上げ方が上手なのだろうか、と見ながら考えた。男子で一番痩せている高岡君は、巻きつけずに途中でほぐれてしまった。自分もあんなのだ、とミツエは思った。

男子が終り、女子で一番背の低いミツエの番になった。見たことも、考えたことも、もう何の役にも立たなかった。わかるのはただ、みんなが見ていることと、すぐ横に橋本先生がいることだけだった。ミツエは眼をつむるような気持で鉄棒をつかみ、足を振り上げた。先生が手でお尻を支えてくれたが、足はストンと落ちてしまった。

「もう一息だ」

と先生は言ってくれたが、やっぱりだめだった、と恥ずかしさを感じながら、男子たちの横にしゃがんだ。でも、とミツエは、今感じたものを、もう一度思い出してみた。鉄棒をしながら感じた感じは、する前に思っていたのと、すこし違っていた。前に逆上がりをしたときは、鉄棒が遠い感じで、腕に力が入らず、体がばらばらになってしまうような感じだった。でも今回は、そのときよりも、すこし鉄棒が自分の中心に近い感じで、体も前ほどばらばらではなかったような気がする。

女子も一とおり逆上がりを終えると、先生は時計を見て言った。

「今日は始業がオクれて、あまり時間がないが、あとの時間は逆上がりができない者のトクンをする。できた者はこっちに並んで、やはり逆上がりをする。できなかった者、こっちに並べ」

男子で逆上がりができなかったのは高岡君一人、女子はミツエと、松原里美と、一番背の高い二谷カヨ子の三人だった。四人ではすぐに順番がまわってくる。先生は「つぎ」と言う以外、何も言わずに一人一人のお尻に手を添えた。何度目かに、思いがけず里美がくるりと鉄棒のまわりに巻きついた。

「できたじゃないか！」と先生が言った。

「できたー」

と里美が、眼をまん丸くし、口も大きくあけて、空に叫ぶように言った。むこうの列から仲良しの木崎富子が飛んできて、二人で手を取り合って「できた、できた」とピョンピョンはねた。

高岡君は途中で照れ臭そうに笑って、（ A ）になる。二谷カヨ子は鉛筆か割り箸ばしのように（ B ）で、なかなか鉄棒に巻きつけない。ミツエは自分がどうなのかはわからなかった。三人とも逆上がりができないままに、終業の鐘が鳴った。

授業がぜんぶ終ると、ミツエは掃除当番の関のぼるに「鉄棒のところまで待ってる」と言って校庭へ走っていった。そしてランドセルを地面に置き、鉄棒をにぎった。^f さっきの体操の時間、もうすこし鉄棒をやっていたような気がしたのだ。そんなことは初めてだった。

ミツエが逆上がりの練習をしていると、大山澄子と根本千代がブランコのところに来てしゃがんだ。掃除当番の君塚照子と二谷カヨ子を待IIIつらしい。何度目かに足を蹴り上げたとき、ミツエは今までとまったく違う感じがして、頭の中が真白になった。何が起こったのかわからなかったが、眼帯をはずしたときのように、自分のまわりがIIIハレツIIIしたような感じがした。自分のまわりの空気にヒビが入って、空気が割れたような感じがしたのだ。その真ん中に自分がある。空がぐらぐら揺れて、大きな笑い声を出しているような気がした。

自分が笑っているのだ。自分は今、IV笑IVっている、と強く感じながら、ミツエは自分の中からこみ上げてくる笑いを声に出した。今まで笑ったことはなかった、という不思議な感じがした。

ミツエはもう一度、逆上がりをしてみた。やっぱりできた。そのことを、誰かに言いたかった。ブランコのところから、根本千代と大山澄子がこつちを見ていた。千代は口をぽかんとあけ、澄子はIVシンケンIVな顔をしていた。ミツエは二人にむかって大声で、

「できたー」

と言った。すると、千代は澄子の方を見て、澄子は眼を伏せてしまった。

（千刈あがた『野菊とバイエル』による）

問一 二重傍線部①～④のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 波線部Ⅰ～Ⅳのうち、その動作を行っている人物が異なるものが一つだけあります。記号で答えなさい。

問三 傍線部 a 「見たことも、考えたことも」とありますが、それが具体的に書かれている一文を本文中より抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問四 傍線部 b 「一息」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ひとやすみ イ 少しの努力 ウ 少しの時間 エ 深く息を吸い込むこと

問五 傍線部 c 「鉄棒をしながら感じた感じ」とはどんな感じですか。本文中より十五字以内で抜き出しなさい。

問六 傍線部 d 「何度目かに、思いがけず里美がくると鉄棒のまわりに巻きついた。」という一文から、主語と述語をそれぞれ一文節で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部 e 「むこうの列」とはどんな列ですか。解答欄の「列」に続くように本文中の語句を用いて十五字以内で答えなさい。

問八 空欄部（ A ）（ B ）に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア AⅡ疲れきった顔 BⅡ痩せ細った感じ
イ AⅡふざけた顔 BⅡ細長い感じ

ウ AⅡあきらめた顔 BⅡまつすぐな感じ
エ AⅡ楽しそうな顔 BⅡとんがった感じ

問九 傍線部f「さっきの体操の時間、もうすこし鉄棒をやっていたいような気がした」と対立するミツエの気持ちを本文中より十六字で抜き出しなさい。

問十 次の一文が本文から抜け落ちていました。元の位置に戻したときの直前の五字を本文中より抜き出しなさい。

尻上がりや足かけ上がりは、ミツエにもできた。

問十一 本文中におけるミツエの気持ちの変化として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 恐怖 ↓ 不満 ↓ 安心
イ 怒り ↓ 興味 ↓ 驚き

ウ 不安 ↓ 焦り ↓ 期待
エ 絶望 ↓ 緊張 ↓ 喜び

【四】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人目を忍んで会っている場所においては

全然寝ずに終わってしまう そのままどこもかしこも

しのびたる所にありては、夏こそをかしけれ。いみじく短き夜の、明けぬるに、つゆ寝ずなりぬ。やがてよろづの所あけながらあれば、涼しく見えわたされたる。

やはり 言いたいことがあるので

互いに

すぐ座っている真上から

ひどくあらわな気持ち

なほいますこし言ふべきことあれば、かたみにいらへなどするほどに、ただゐたる上より、鳥の高く鳴きて行くこそ、顕証なる心地してをかしけれ。

何かの底からであるかのように

鶏の声

羽の中にくちばしを埋めたまま鳴く声が

また、冬の夜いみじう寒きに、うづもれ臥して聞くに、鐘の音の、ただ物の底なるやうに聞こゆる、いとをかし。鳥の声も、はじめは羽のうちに鳴くが、

口をこめながら鳴くので

奥深く遠くに聞こえるのが

口をこめながら鳴けば、いみじうもの深く遠きが、明るるままに、近く聞こゆるもをかし。

（『枕草子』による）

問一 二重傍線部①「をかしけれ」②「いらへ」の読み方を現代仮名づかいに直し、ひらがなで答えなさい。

問二 傍線部 a 「いみじく」 c 「臥して」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

a いみじく 「ア しばらく」 イ 非常に ウ 少し エ いきなり 「

c 臥して 「ア 落ち込んで」 イ 面白がって ウ 横になって エ 目を閉じて 「

問三 傍線部 b 「つゆ寝ずなりぬ。」とありますが、その理由として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 夏は暑くて寝苦しいから。

イ 夏は誰かと話していたくなるから。

ウ 夏は日が昇るのが早いから。

エ 夏は楽しいことが多くあるから。

問四 傍線部 d 「聞こゆる」の主語を本文中より三字で抜き出しなさい。

問五 次の解説文を読み、空欄部（A）（B）に入る適切な語をそれぞれ本文中より一字で抜き出しなさい。

【解説文】

作者は、男女が人に知られないように会っている場所の（A）の朝の様子に着目している。家の中をあちこち開放して見渡せるさまやもう少し話をしたい二人の頭上で鳥が鳴くさまに面白さを感じている。後半ではくぐもった深く響く二つの（B）の音、夜の鐘の音と夜明けの鶏の声を面白いと言っている。鶏が眠さや寒さから次第に目覚めてくるさまをその声から聞き分けているのが作者の感覚の鋭いところである。

問六 『枕草子』について、次の問いに答えなさい。

（1）作者名を漢字で答えなさい。

（2）成立時代を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 平安時代

イ 明治時代

ウ 鎌倉時代

エ 室町時代

国
語
解
答
用
紙

四		三					二			一	
問 四	問 一	問 十	問 八	問 六	問 三	問 一	問 七	問 三	問 一	問 二	問 一
	①			主 語		①		b	①	①	①
問 五											②
A			問 九	述 語				c	②	②	
	②	問十一			問 四	②					③
B							問 八				
				問 七		(れて)		問 四	③	③	④
	問 二				問 五	③		A			
	a										⑤
問 六									(わない)		
(1)							}	D	④	④	
											⑥
	c					④			④		
									(え)		
								問 五	⑤		
	問 三						か				
(2)						問 二	ら				
							問 九	問 六	(い)		
									問 二		
						列					

受 験 番 号
得 点

各2点 (2×50)

国語解 答 用 紙

四		三					二			一	
問 四	問 一	問 十	問 八	問 六	問 三	問 一	問 七	問 三	問 一	問 二	問 一
鳥 の 声 問五 A 夏 B 冬 問六 (1) 清少納言 (2) ア	① おかしけれ	助 を し た 。	ウ	主 語 里美が	逆 上 が り が	① 準 備	自 分 と い う 存 在 人 間 は 日 常 的 な 建 築 し て い く か ら	b イ	① にんしき	① ○	① ア ② イ ③ エ ④ ウ ⑤ カ ⑥ オ
	② いらえ	問十一 エ		問九 体 操 の 時 間 な ん て な け れ ば い い い の に	述 語 巻きついた	問四 イ 問五 鉄 棒 が 自 分 の 中 心 に 近 い	② 遅 （れて） ③ 破 裂 ④ 真 剣 問二 Ⅲ	問八 は 日 常 的 な 建 築 し て い く か ら	c ア	② はんべつ	② 幼 い
	問二 a イ c ウ		問七 逆 上 が り が 自 分 の 中 心 に 並 ん で い る 列	問五 鉄 棒 が 自 分 の 中 心 に 近 い	問四 イ 問五 鉄 棒 が 自 分 の 中 心 に 近 い	問八 は 日 常 的 な 建 築 し て い く か ら		問四 A イ D エ	③ は ら （わ な い） ④ あ た （え）		
	問三 ウ						問九 鉄 棒 が 自 分 の 中 心 に 近 い	問二 Ⅲ	問六 ウ		
								問九 イ			

受験番号
得点